

ボランテイア

幸せ人論

すがなみ
菅波 茂



世の中には、二種類のパスポートがあります。一つは、国が発行してくれる身分証明書です。もう一つは、国際ボランテイア活動をする身分証明書です。それは、「家族写真」です。私たちAMDAは世界中で、内戦で難民になったり自然災害で被災民になり、私たちの救援活動を必要とされる人たちの所に、医療チームを派遣して

います。

現在も、旧ユーゴスラビアで、お互いに敵対しているセルビアとクロアチアの両方にチームを派遣しています。ところが、セルビア人の難民もクロアチア人の難民も、必ず家族の写真だけは肌身離さず大切に持っています。生活に必要なものは、戦乱によりほとんどなくなっています。その中で、最後まで大切なのが「家族写真」です。

AMDAのメンバーも、「家族写真」を持って行きます。「家族写真」を見せると、お互いの心がすぐ通じ合います。肝心なのは、自分の「家族写真」を説明する時の気持ちです。

家族とは、親子、夫婦を核とする人間関係です。日ごろから家族関係が仲良くいってれば、幸せそうに説明できます。そうでなければ、ぎこちない説明になります。この気持ちは、瞬時にして相手に伝わります。

「家族写真」に加えて幸せな説明ができれば、難民あるいは被災民の方たちは、私たちのことを「家族を大切にしている信頼できる相手」として、心から気持ちを共有してくれます。これが、「ボランテイア幸せ

人論」です。

よく間違われます。特別な心をしているから、ボランテイアができるのではないかと。あるいは、ボランテイア活動をすれば、幸せになれるのではないかと。逆です。幸せだからこそ、ボランテイアができるのです。あふれるような幸せ感が、他人のために何かをさせてもらいたいという衝動に走らせるのです。幸せな人は、他人の幸せが心から喜べるのです。不幸な人は、他人の幸せは嫉妬の対象となります。

難民や被災民は、不幸な境遇にあります。それを見て不幸せな人は、思わずが身の相対的な幸せを喜ぶ可能性がありません。援助を受ける人たちの感受性は鋭敏です。瞬時にして、ボランテイアの相対的な幸せを感じ取るかもしれません。そうなれば、万幸です。ボランテイア活動に対する感謝の気持ちが、嫌悪感に変わってしまいます。

難民や被災民の方たちは、時として世の中から見放された絶望的な気持ちになっていることがあります。遠くの国からボランテイア活動に駆けつけることは、特別の意味があります。

「私たちのことを見守ってくれている人たちがいる」この事実は、絶望を希望へと変えます。人はよく自問します。これだけのボランテイア活動で何ができるのかと。駆けつけることがまず大切です。「家族写真」を持って。何ができるかは、その次です。

AMDAは、アジアを故郷とするNGOですが、今やそのネットワークは世界中に広がっています。絶望を希望に変えるために。

(医師・アジア医師連絡協議会代表)

